

多様性教育による韓国への潜在的・顕在的態度の変容可能性の検討

稲垣（藤井）勉^{*1}

^{*1} 長崎大学大学教育イノベーションセンター

Changing Implicit / Explicit Attitudes Towards South Korea Through Diversity Education

Tsutomu INAGAKI (FUJII)^{*1}

^{*1} Center for Educational Innovation, Nagasaki University

Abstract

An experimental study revealed how negative implicit/explicit attitudes toward South Korea can be changed. Through diversity education, a pre-post-test cognitive intervention was conducted. Participants were 18 undergraduates. Following baseline assessments of implicit/explicit attitudes, attitude change was measured immediately after the intervention. Through three lectures, the cognitive intervention provided information about South Korea and Korean culture. The results showed that the cognitive intervention induced positive changes in the explicit attitude towards South Korea significantly. However, the implicit attitude remained unchanged. The limitation of present study and future perspectives were discussed.

Key Words : Diversity Education, Implicit Attitude, Explicit Attitude, Attitude Change, Korea

1. はじめに

態度 (attitude) とは、「関連する全ての対象や状況に対する個人の反応に対して、直接的かつ力動的な影響を及ぼす、経験に基づいて組織化された、精神的神経的準備状態 (Allport, 1935; 訳出は小林・岡本, 2004)」や、「比較的持続した、対象に対する全ての判断 (VandenBos, 2007; 訳出は栗田・楠見, 2014)」などと定義されている。すなわち、態度とは特定の対象への評価のことであり、私たちの捉え方や感じ方を指していると言える。

これまで、人種やジェンダー、特定の商品など、ある対象への態度の測定にあたっては、伝統的に質問紙やインタビューといった自己報告式の尺度が用いられてきた。特に質問紙調査法は、集団場面において一斉実施が可能であり、データの収集が容易であることや、一度の測定で多くの変数を

測定できるというメリットから、心理学の広範な領域において、数多くの研究で使用されてきた。今日における心理学の発展に、この自己報告式の調査が大きく寄与したことは事実と言える (藤井, 2012)。

しかしながら、自己報告式の尺度には、社会的に望ましい回答をしようとする動機によって回答が歪む可能性 (Edwards, 1957) や、そもそも内省による回答には限界があること (Nisbett & Wilson, 1977) など、長年にわたりいくつかの課題が指摘され続けてきたと言える。前者の例として、社会的望ましさを反応を測定する尺度は、他の特性や信念といった諸変数と一定の相関を示すという研究がある (e.g., 藤井, 2010; 藤井・上淵・利根川・上淵・山田, 2010; Hart, Ritchie, Hepper, & Gebauer, 2015; 谷, 2008)。また、後者に関して、私たちは

古くから「無意識」という概念の存在は想定してきたが、それらは科学的に検討する対象ではなく、その影響力も限られたものであると捉えられてきた(潮村, 2016)。

1.1 潜在的な態度の存在と影響 しかし、近年は複数の研究において、自らも意識していない「潜在的 (implicit)」な態度が、様々な行動を予測することが示されてきている。本研究で述べる「潜在的な態度」とは、「対象に関わりを有する過去経験の痕跡であり、内観によって同定できない(または、正確に同定することはできない)痕跡 (Greenwald & Banaji, 1995; 訳出は潮村, 2016)」と定義される。この定義からすれば、内観にもとづく自己報告式の尺度では対象者の潜在的態度の測定は不可能であると言える。

それでは、こうした潜在的態度はどのようにして測定され、どのような行動に結びついているのだろうか。McConnell & Leibold (2001) は、白人の実験参加者 42 名に対して、顕在的測定である自己報告と、潜在的測定(詳細は後述する)の両者を用いて、黒人および白人への相対的な態度を測定した。その後、黒人の実験者と相互作用をする場面に参加者を置き、その際の行動をビデオカメラで撮影し、記録した。これらの行動指標と潜在的・顕在的な態度との関連を検討した結果、潜在的測定で測定された黒人への潜在的態度がネガティブな参加者ほど、黒人の実験者との相互作用において、ためらいや言い間違いが多くなることが見出された。また、自己報告による顕在的態度は、こうした行動指標を予測することができなかった。McConnell & Leibold (2001) と同様の結果は、この研究とは異なる種類の潜在的測定を用いた Dovidio, Kawakami, Johnson, Johnson, & Howard (1997) でも得られており、潜在的測定を用いて測定された態度は、ノンバーバルな回避行動と関連することが示されている。

1.2 潜在連合テスト 近年、このような潜在的な態度の測定に多く用いられているのは、潜在連合テスト (Implicit Association Test; Greenwald, McGhee, & Schwartz, 1998; 以下 IAT とする) である^{注1)}。IAT は、画面上に連続して現れる単語の分類課題を通して、特定の概念間の連合を間接的に

測定するものである。たとえば、IAT を用いて黒人や白人への潜在的態度を測定する際は、カテゴリ次元(黒人—白人)と属性次元(良い—悪い)に関連する刺激(e.g., 黒人の名前, 白人の名前, 快い, 不快な, などの語や画像)が画面中央に連続して呈示され、その刺激が画面の上部左右に呈示されているグループ(左側に「黒人+良い」、右上に「白人+悪い」、もしくは左側に「白人+良い」、右側に「黒人+悪い」)のどちらに属するか、対応するキー(e.g., 左であれば F キー, 右であれば J キーなど)を押すことによって判断する課題を行う。この課題では、「可能な限り早く正確に判断する」という教示の下で、カテゴリ次元と属性次元が組み合わされた試行を 2 種類(そのうち 1 種類は組み合わせが逆になったものである)を行い、反応時間が短い組み合わせ課題の方が、対になっているカテゴリと属性の連合が強いと判断される。IAT は種々の潜在的測定の中でも信頼性・妥当性に優れ、個人差の測定にも十分に敏感とされる(潮村, 2008, 2016)。

これまで、潜在的測定は安定した態度や特性を測定する上で重要である再検査信頼性(または、安定性)が不十分であることが繰り返し指摘されてきた(Asendorpf, Banse, & Mücke, 2002; Fazio & Olson, 2003)。そのような中でも、この IAT は潜在的測定の中でも比較的高い再検査信頼性を示とされる(e.g., Bosson, Swann, & Pennebaker, 2000)。たとえば Bosson et al. (2000) は、IAT を含めて 7 つの潜在的測定を用いて、潜在的に自尊心を測定する試みを行い、平均 31.23 日の間を空けて再検査を実施し、種々の潜在的測定の再検査信頼性(i.e., 2 時点における得点の相関係数)を検討している。ここでは、たとえばストループ課題では -.05、閾下プライミング課題では .28、誕生日への選好は .53 という再検査信頼性が報告されているが、IAT の再検査信頼性は .69 であった(IAT 以外の潜在的測定の再検査信頼性の平均値は .31、中央値は .33 であった)。また、Lane, Banaji, Nosek, & Greenwald (2007) は、IAT の再検査信頼性を検討した 20 の研究をまとめており、IAT の再検査信頼性は $rs = .25 \sim .69$ の範囲を取り、中央値は $Mdn = .50$ であったことを報告している。また、潜在的

な不安を測定する IAT の安定性を検討した Egloff, Schwerdtfeger, & Schmukle (2005) は, 1 週間間隔で $r = .58$, 1 ヶ月間隔で $r = .62$, 1 年間隔で $r = .47$ という再検査信頼性を報告しており, 1 年という長い期間においても, 不安 IAT の得点は安定していることが示されている。そして, Schmukle & Egloff (2004) は, 実験参加者に対して不安を喚起させる実験的操作を行っても, 不安 IAT の得点には変化がみられないことを明らかにし, IAT で測定される不安が特性的なものであることを示している。

本邦においても IAT の再検査信頼性を検討した研究は複数報告されている。たとえば藤井・上淵 (2010a) は, 動機づけの概念の一つである「暗黙の知能観」を測定する IAT を作成し, 1 週間間隔における再検査信頼性が $r = .70$ であったことを報告している。また, 藤井 (2013a) は Egloff & Schmukle (2002) にならって不安を測定する IAT を作成し, 1 週間間隔における再検査信頼性は $r = .76$ であった。加えて, シャイネスを測定する IAT (相川・藤井, 2011; 藤井・相川, 2013) の再検査信頼性は 1 週間間隔では $r = .67$ (Fujii, Sawaumi, & Aikawa, 2013), 1 ヶ月間隔では $r = .54$ (藤井・澤海・相川, 2015a) であった。中野・藤井 (2013) による達成目標志向性を測定する IAT は 10 日間隔で $r = .65$ の再検査信頼性が報告されている。これらの研究から, 近年の代表的な潜在的測度の中

では, IAT が一定の再検査信頼性を有すると考えることができよう。

従来, IAT は自尊心 (Greenwald & Farnham, 2000; 藤井・澤田, 2014; 藤井・澤海・相川, 2014; Fujii, Sawaumi, & Aikawa, 2014) やステレオタイプ (Dasgupta & Greenwald, 2001) を扱う研究に多く用いられていたが, 近年は不安 (藤井, 2013a, 2014; Egloff & Schmukle, 2002; Egloff et al., 2005; 上田, 2012) やシャイネス (相川・藤井, 2011; Asendorpf et al., 2002; 藤井・相川, 2013, 藤井他, 2015a, 2015b), そして Big Five (Back, Schmukle, & Egloff, 2009) などの特性や, 暗黙の知能観と呼ばれる, 知能に対する信念 (藤井・上淵, 2010a) や愛着の内的作業モデル (藤井・山田・上淵・利根川, 2011; 大浦・福井, 2014; 山田・藤井・上淵・利根川, 2011; Yamada, Fujii, & Uebuchi, 2011), 他者軽視傾向 (藤井・上淵, 2011; Ichikawa, Murakami, & Mochizuki, 2013), 非行少年への態度 (Fujiwara & Fujii, 2016), いじめに対する態度 (藤井・澤田, 2016; Fujii & Sawada, 2016) など, 種々の心的傾性の測定に幅広く応用されている。

IAT は基本的にコンピュータを用いて実施するが, コンピュータを用意することが難しい環境でも使用できるよう, 近年は紙筆版の IAT も開発されている (e.g., 藤井, 2009; Fujii & Sawada, 2016; 藤井・上淵, 2010b; 金田・岡本, 2015; 岡部・木島・

日本 良い		韓国 悪い
	身勝手な	
	日本語	
	無責任な	
	東京	
	積極的な	
	ソウル	
	薄情な	
	🇯🇵	
	温厚な	
	🇰🇷	

韓国 良い	日本 悪い	
	冷淡な	
	日本語	
	残忍な	
	パク	
	身勝手な	
	🇯🇵	
	快活な	
	佐藤	
	積極的な	
	鈴木	

図 1 日本—韓国 IAT の例

注) 上側の組み合わせパターンと下側の組み合わせパターンの正答数の差を取り, 正答数が多い組み合わせの方が, 太枠内にペアになって呈示されている 2 つの概念 (カテゴリーと属性, たとえば「日本」と「良い」) の連合が強いと判断される。

佐藤・山下・丹治, 2004; 潮村, 2015, 2016)。紙筆版 IAT とコンピュータ版 IAT の大きな違いは、刺激の呈示方法である。前述のとおり、コンピュータ版 IAT は画面上に連続して呈示される刺激をキー押しによって左右に分類するが、紙筆版 IAT はページの中央に刺激が縦一列に並んでおり、上から順に、左右どちらに分類すればよいかを判断し、刺激の左右にチェックを入れていくものである。本研究で用いた日本—韓国 IAT の一部を図 1 に示す。

コンピュータ版 IAT はそれぞれのブロックにおいて、任意の回数 (e.g., 20 試行や 40 試行など) 刺激を呈示し、それらを参加者がどの程度素早く、正確に分類できたかを、画面上部に呈示されたカテゴリーと属性 (e.g., 日本+良い, または韓国+良い) の連合強度の指標とする一方、紙筆版 IAT は各ブロックに制限時間を設け、その時間内に正しくチェックできた個数を、紙面上部に呈示されたカテゴリーと属性の連合強度の指標とする。紙筆版 IAT は、エラー反応 (誤答) に対してその旨をフィードバックできないといったデメリットはあるものの、コンピュータ版 IAT と比して集団での実施も容易であるとともに、コンピュータ版 IAT と紙筆版 IAT は一定の相関を示すことが複数の研究において報告されており (藤井, 2009; 藤井・上淵, 2010b; 岡部他, 2004), 紙筆版 IAT の精度がコンピュータ版 IAT に比して著しく低いといった報告はみられない。

1.3 潜在的・顕在的態度の変容可能性の検討 McConnell & Leibold (2001) や Dovidio et al. (1997) が示したように、特定の人種に対する回避行動といった望ましくない行動と関連する態度があるならば、それを低減させることで、結果として不適切な行動の生起を減らすことができると推察される。これまでの介入研究では、介入の前後で自己報告式の尺度を用いて参加者の態度を測定し、その得点に変化するか否かを検討するものが中心であった (e.g., Krahé & Altwasser, 2006)。当然ながら、この方法では潜在的な態度の変容を検討することはできない。IAT のような安定した潜在的測度の登場により、潜在的側面の変容についても検討することが可能になると同時に、どのような介

入が潜在的態度に影響を及ぼし得るかの検討が進んできたと言える。以下では、心的傾性の潜在的・顕在的側面の変容に迫った研究をいくつかレビューする。

1.4 潜在的側面の変容を示した研究 たとえば、尾崎 (2006) は 40 名の参加者に対し、図形 (楕円、四角) に対する潜在的・顕在的態度の変容可能性について検討を行った。まず、参加者の図形への潜在的・顕在的態度をそれぞれ IAT・SD 法を用いて尋ねた後、机上に置かれた楕円もしくは四角が描いてあるカードの束を上から一枚ずつめくらせ、カードに指定された図形が描かれていれば自身の近くに移動 (接近) させ、それ以外の図形が描かれていれば遠くに移動 (回避) させるという「評価条件づけ」課題を実施した。続いて、あらためて潜在的・顕在的測度を用いて、参加者の図形への態度を測定したところ、楕円への潜在的な態度がポジティブに変容していた^{注 2)}。その一方で、顕在的な態度には変容はみられなかった。この結果は、評価条件づけを用いて、特定の態度対象に接近あるいは回避をさせる介入を繰り返し行うことで、潜在的態度が変容するという可能性を示している。

1.5 顕在的側面の変容を示した研究 また、態度の研究ではないが、藤井・澤海・相川・中野 (2016) や Sawaumi, Fujii, Nakano, & Aikawa (2015) は、尾崎 (2006) と類似した手法を用いて、潜在的・顕在的シャイネスの変容可能性を検討している。ここでは、参加者に対してコンピュータを利用した評価条件づけ課題を行い、潜在的・顕在的シャイネスの低減を試みた。その結果、評価条件づけ課題の前後において、潜在的シャイネスの指標であるシャイネス IAT の得点には有意な変化はみられなかった一方で、形容詞対による SD 法で評定した顕在的シャイネスは有意に低減していたことが示された。すなわち、この研究では、評価条件づけによって顕在的側面のみが変容したという結果が得られている。

1.6 潜在的・顕在的側面の変容を示した研究 加えて、Rudman, Ashmore, & Gary (2001) は、黒人への潜在的・顕在的な偏見およびステレオタイプを低減させる試みを行なっている。この実験では、

半期にわたり、アフリカ系アメリカ人の教授が行う「偏見と葛藤セミナー」を受講した参加者は、潜在的・顕在的な偏見およびステレオタイプが有意に減少していたことが示された。

また、Gamer, Schmukle, Luka-Krausgrill, & Egloff (2008) は、高い社交不安を示す臨床群と、特に不安が高くない統制群の両者に対し、セラピストによる認知行動療法ベースの介入を 4 セッション（合計 10 時間）実施し、潜在的・顕在的不安の変化を検討した。その結果、臨床群の潜在的・顕在的不安の得点はともに、セッション前後において有意に減少したことが示された。

このように、潜在的・顕在的側面の一方、もしくは両方が変容したという研究が国内外で報告されているが（その他のレビューは藤井（2011）などを参照）、潜在的測度である IAT が発表されてから 20 年も経過していない今日では、潜在的・顕在的側面を併せて変容過程を検討している研究の数は十分とはいえず、知見の蓄積は有益であると考ええる。

1.7 本研究で対象とする態度対象 本研究では、著者が携わっている講義を通じて、韓国への潜在的・顕在的態度の変容可能性について検討を行う。本邦において一時期の「韓流ブーム」は過ぎ、今日では「嫌韓」や「反韓」といった表現がメディアで用いられるようになって久しい（e.g., 権, 2015）。ある対象への態度は、当該対象との直接的な接触だけでなく、間接的な接触、すなわちマス・コミュニケーションやパーソナル・コミュニケーションなどによっても、その形成・変化の契機となるとされる（田中・古畑・宮田・村田, 1979）。したがって、韓国へのネガティブな態度は、メディアなどから提供される情報にも一定の影響を受けていると考えられる。McConnell & Leibold (2001) や Dovidio et al. (1997) の知見を踏まえれば、韓国に対してネガティブな潜在的態度を抱いている場合、韓国や韓国人に対する回避行動といったネガティブな結果に結びつく可能性が推察される。

1.8 多様性教育の可能性 こうした他集団へのネガティブな態度を変容させるには、多様性（diversity）の教育が一定の効果をあげる可能性が

ある。たとえば、栗田（2015）は、障害者への態度を例にとり、障害者の「人柄」に注目させることで、潜在的・顕在的な態度が影響を受けるか否かを検討している。ここでは、実験群の参加者には障害者の画像を呈示し、当該人物の人柄について連想した内容を記述させた。その一方で、統制群には中性的な刺激（ソファの画像）を見せ、そこから連想した内容を記述させた。その後、IAT と質問紙を用いて障害者への態度を測定したところ、両群の IAT 得点には有意な差はなかった一方、顕在的測度の得点には有意差がみられ、実験群の持つ障害者への態度が、統制群と比してポジティブであったことが示されている。

加えて、Krahé & Altwasser (2006) は、中学 3 年生 70 名を対象に、身体障害者の特徴やステレオタイプに関する講義や、実際に障害を持つアスリートと接触する体験などを通じて、ネガティブな顕在的態度を低減させる試みを行った。この研究では、講義の他に実際に障害者との交流を行う介入を受けた群は、講義のみを受けた群や統制群と比して、障害者へのネガティブな態度が低減し、その低減はフォローアップ調査時（3 ヶ月後）でも持続していることが確認された。

そして、先述の Rudman et al. (2001) でも、「偏見と葛藤セミナー」と題される多様性教育を実施することによって、黒人に対する潜在的・顕在的な偏見およびステレオタイプが低減することが示されている。

このように、参加者に当該集団について考えさせたり、多様性教育を行ったりすることを通じて、少なくとも顕在的態度が変容する可能性は示されている。特に栗田（2015）では、潜在的態度には実験群と統制群との間に差はみられなかったが、この実験デザインはプレ・ポストデザインではなく、態度対象の人柄に注目するか否か、という一度限りの操作によって態度に差がみられるか否かを検討している。したがって、Krahé & Altwasser (2006) の実験のように、繰り返し態度対象について考えたり調べたりする機会が与えられれば、当人の潜在的態度にも変容がみられるかもしれない。

そこで、本研究では著者が担当する 3 回分の講

義によって、韓国の文化について参加者が持つ知識を増やし、理解を深めるとともに、韓国の文化について参加者自ら調べてまとめるというレポート課題を課すことを通じて、参加者の潜在的・顕在的態度が変容するか否かを検討することをめざす。

実際に田中他（1979）は、韓国および韓国人への態度を取り上げ、参加者を2群に分け、韓国に好意的あるいは非好意的な内容の本を読ませたのち、共感できる箇所や反感を持つ箇所を挙げさせるといった操作を行い、参加者の態度変容を追った。その結果、好意的な内容の本を読んだ参加者の韓国および韓国人への態度はポジティブな方向に変容した一方、非好意的な内容の本を読んだ参加者はその逆の態度変容を示した。本を読ませるという1度限りの介入で態度の変容がみられていることから、本研究で設定する3回という介入回数は少ないものではなく、一定の効果をあげる可能性が期待できる。ただし、田中他（1979）の研究では潜在的態度は測定されておらず、態度の潜在的側面も変容したか否かは定かでない。したがって、多様性教育が態度に与える影響を、顕在的側面のみならず潜在的側面からも検討するという点が、本研究の特色であると言える。

2. 方法

2.1 参加者 長崎大学において多文化社会に関する講義を受講している大学生18名（男性8名、女性10名）に、講義の一環として参加を求めた。

2.2 材料 本研究では、以下の材料を用いた。

(a) 紙筆版 IAT 潮村（2015）を参考に、カテゴリ語を「日本」「韓国」とし、属性語を「良い」

「悪い」として作成した。カテゴリ語や属性語、刺激語は表1に示す通りである。刺激語は、「良い」「悪い」の属性語は藤井（2013b）で使用されているものを使用し、「日本」「韓国」のカテゴリ語は、「～語」にあたる表現（日本語, 한글），各国の国旗（実際には文字ではなく画像を用いた）、首都（東京, ソウル）、典型的な苗字（佐藤, 鈴木, キム, パク）を用いることとした。初回の実施時は4ブロック構成、最終回の実施時には8ブロック構成で実施した（表2）。初回のIATは4ブロックから構成されており、第1, 2ブロックでは「日本+良い/韓国+悪い」の組み合わせ課題を練習（第1ブロック）、本番（第2ブロック）に分けて実施した。続く第3, 4ブロックでは、「韓国+良い/日本+悪い」の組み合わせ課題を練習（第3ブロック）、本番（第4ブロック）に分けて実施した。最終回では、このパターンに加えて、「日本+悪い/韓国+良い」の練習および本番（それぞれ第5, 6ブロック）と、「韓国+悪い/日本+良い」の練習および本番（それぞれ第7, 8ブロック）を追加し、カテゴリ語および属性語のすべての組み合わせで構成される課題を実施した^{注3)}。

表1 IATのカテゴリ語、属性語および刺激語

日本	韓国	良い	悪い
日本語	한글	温厚な	残忍な
日本国旗	太極旗	快活な	冷淡な
東京	ソウル	親切な	身勝手な
佐藤	キム	積極的な	薄情な
鈴木	パク	朗らかな	無責任な

注) 上段はカテゴリ語・属性語、下段は刺激語。

日本国旗・太極旗はともに画像を使用した。

表2 本研究で用いたIATの手続き

ブロック	内容	課題の内容	制限時間
1	組み合わせ課題-練習1	日本+良い-韓国+悪い	10秒
2	組み合わせ課題-本番1	日本+良い-韓国+悪い	20秒
3	組み合わせ課題-練習2	韓国+良い-日本+悪い	10秒
4	組み合わせ課題-本番2	韓国+良い-日本+悪い	20秒
5	組み合わせ課題-練習3	日本+悪い-韓国+良い	10秒
6	組み合わせ課題-本番3	日本+悪い-韓国+良い	20秒
7	組み合わせ課題-練習4	韓国+悪い-日本+良い	10秒
8	組み合わせ課題-本番4	韓国+悪い-日本+良い	20秒

注) 初回はブロック1～4の4ブロック構成、最終回はブロック1～8の8ブロック構成のIATを実施した。

(b) 韓国の印象評定尺度 沼崎・工藤 (2003) で使用された尺度を参考に、23 の形容詞対を用いて、SD 法により韓国の印象を評定する尺度を作成し使用した。「個人的親しみやすさ (e.g., 人付き合いのよい-人付き合いの悪い, 感じの悪い-感じのよい)」、「社会的望ましさ (e.g., 意地悪な-親切な, 謙虚な-図々しい)」、「活動性 (e.g., 不活発な-活発な, 重々しい-軽い)」の 3 下位尺度からなる。

(c) 韓国との接触経験尺度 これまで参加者が韓国とどの程度接してきたかによって、潜在的・顕在的態度に相違があるかを検討するため、栗田 (2015) を参考に、今までに韓国を訪問した回数 (回)、韓国人の友人の数 (人)、韓国のドラマを視聴する頻度 (全く見ない, ほとんど見ない, 多少見る, よく見る)、韓国映画を視聴する頻度 (全く見ない, ほとんど見ない, 多少見る, よく見る)、これまで日韓交流イベントに参加したことがあるか (ない, 何回かある, 複数回ある) を問う項目を作成して使用した。

(d) 韓国への関心尺度 3 回の講義を受講したのち、参加者が韓国に対してどの程度関心を持っているか (もしくは持っていないか) を問う項目を作成し、使用した。具体的には「授業を受けて、韓国の理解が深まった」、「韓国は好きではない」、「授業を受けて、前より韓国について知っていることが増えた」、「韓国についてもっと調べてみようと思った」、「韓国とは距離を感じる」という 5 項目について、それぞれ「1: 全くあてはまらない-5: 非常にあてはまる」の 5 件法で評定を求めた。

2.3 手続き 参加者に対し、今回の課題は講義の一環として実施するが、成績との関連は一切ないこと、課題の内容は最終回の講義の際に説明することを教示し、参加を求めた。この説明を聞いて不参加を申し出た参加者はいなかった。なお、2 回目の調査と紐づけを行う必要があったため、初回・最終回ともに学籍番号の記入を求めた。

その後、まず IAT を実施した。各ブロックについて、練習は 10 秒、本番は 20 秒の制限時間を設け、時間内に課題がすべて終わらなかった場合も、実験者の合図で回答をやめるよう事前に教示した。また、間違えた場合には修正せずに進め、できるだけ速く正確に分類するように、併せて教示した。

IAT 課題の終了後、韓国に対する印象評定尺度および韓国との接触経験を問う尺度を実施し、第 1 回目の調査を終了した。これらの実施に要した時間は 10 分程度であった。

続いて、この第 1 回目の調査日を含めて 3 度にわたり、実験者による韓国の文化についての講義を実施した。講義の中では、表 3 に示したトピックについて著者が紹介し、参加者の意見や感想を適宜求めながら、3 回の講義を行った。なお、各回の講義に先立ち、参加者には講義内容に関連するテーマを示し、A4 用紙で 1 枚程度のレポートにまとめた上で、Web システムを通じて提出するように指示した。これは、参加者に事前に講義内容に関連したレポート課題を行ってもらうことで、講義内容の理解を促進させることを意図したためであった。

3 回の講義ののち、参加者に再度 IAT を実施した。この際は前述の通り、4 ブロックではなく 8 ブロックからなる IAT を使用した。その後、韓国の印象評定尺度および韓国への関心尺度への回答を求めて調査を終了した (韓国との接触経験は 3 週間という短い期間の間に大きく変化する可能性は低いと思われたため、測定しなかった)。この際の実施に要した時間も 10 分程度であった。

最後に、参加者にデブリーフィングを行い、IAT の仕組みを説明すると同時に、潜在的態度を扱った研究について紹介した。併せて、本研究のデータは学術的な目的に限って使用することを伝え、個人の回答が取り上げられることはないことを重ねて教示した。

表 3 3 回の講義の中で取り上げた内容および事前に課したレポート課題の内容

回	内容	レポート課題
1	韓国の基礎的情報, 韓国の衣食住	韓国と日本の日常生活における類似点・相違点
2	第1回の振り返り・韓国の教育事情	韓国の教育事情 (受験, 学習塾など)
3	第2回の振り返り・韓国の社会事情	韓国の社会事情 (交通, インターネット環境など)

3. 結果

3.1 分析対象者について 本研究における参加者18名のうち、初回の講義では1名が欠席し、最終回の講義では2名が欠席したため、これらの参加者については対応のある分析はできなかった（初回と最終回の両方を欠席した者はいなかった）。したがって、初回と最終回の対応がついた参加者は15名であった。

3.2 データの得点化 IATについては、初回（4ブロック構成）は、「韓国＋良い／日本＋悪い」の組み合わせ課題における正答数から、「日本＋良い／韓国＋悪い」の組み合わせ課題における正答数を減じた値を求め、これをIAT得点とした。この値が正の方向に大きいほど、「韓国＋良い／日本＋悪い」の連合が強く、負の方向に大きいほど、「日本＋良い／韓国＋悪い」の連合が強いことを示す。最終回（8ブロック構成）のIATは、4ブロック構成と同様の組み合わせにおける反応数の差をとったIAT得点に加え、「韓国＋良い／日本＋悪い」、「日本＋悪い／韓国＋良い」の2種類の組み合わせにおける反応数の和から「日本＋良い／韓国＋悪い」、「韓国＋悪い／日本＋良い」の組み合わせにおける反応数の和を減じたIAT得点も算出した。

また、韓国の印象評定尺度については、沼崎・工藤（2003）で使用されたものと同様の項目で各下位尺度の構成を試みたところ、「社会的望ましさ」の下位尺度において、信頼性の推定値として算出した α 係数を大きく下げる2項目（「自信のない－自信のある」および「落ち着きのない－落ち着いた」）があったため、これらの項目を削除した上で合算平均値を求め、下位尺度を構成した。

続いて、韓国との接触経験尺度について、韓国の訪問回数および韓国人の友人数は、単純に回数や人数の報告を求めたため、ばらつきが大きかった。そこで、この2項目については対数変換を行い、その値を分析に用いることとした。また、韓国ドラマを見る頻度と韓国映画を見る頻度については、2項目の間に中程度の正の相関（ $r = .64, p = .005$ ）がみられたため、この2項目は「韓国テレビ・ドラマの視聴頻度」として合算平均値を取ることとした。加えて、「これまでに日韓交流イベントに参加したことがある」という項目には参加者のうち15名が「ない」と回答しており、残り2名も「何回かある」という回答に留まったため、この項目は以降の分析には用いないこととした。そして、最終回で測定した韓国への関心を問う尺度の中で、「韓国は好きではない」と「韓国とは距離を感じる」という2項目に中程度の正の相関（ $r = .69, p = .003$ ）がみられたため、この2項目は「韓国へのネガティブ感情」として合算平均値を取ることとした。

3.3 最終回における2種類のIAT得点の相関 前述の通り、最終回に実施した8ブロック構成のIATは、2種類のIAT得点が算出可能である。そこで、4ブロック構成のIAT得点と8ブロック構成のIAT得点の相関係数を算出したところ、両者は極めて強い正の相関を示した（ $r = .93, p < .001$ ）。したがって、本研究では4ブロック構成のIAT得点（「韓国＋良い／日本＋悪い」の組み合わせ課題における正答数から「日本＋良い／韓国＋悪い」の組み合わせ課題における正答数を減じるもの）を用いた場合も、8ブロック構成のIAT得点と大きな差

表4 初回における各尺度の相関係数・記述統計量

	2	3	4	5	6	7	min	max	M	SD	α
1 IAT得点	.46 [†]	.14	.21	.29	.20	.42 [†]	-15.00	3.00	-4.47	4.93	-
2 個人的親しみやすさ	-	.66 ^{**}	.53 [*]	.61 ^{**}	.52 [*]	.55 [*]	2.42	4.08	3.06	0.43	.77
3 社会的望ましさ		-	.51 [*]	.54 [*]	.47 [†]	.41	2.40	5.00	3.40	0.59	.69
4 活動性			-	.52 [*]	.53 [*]	.58 [*]	2.33	4.67	3.65	0.64	.83
5 韓国訪問回数				-	.74 ^{**}	.50 [*]	0.00	5.00	0.82	1.51	-
6 韓国人友人数					-	.09	0.00	10.00	1.59	2.98	-
7 ドラマ・映画視聴頻度						-	2.00	8.00	3.47	1.91	.76

[†] $p < .10$, ^{*} $p < .05$, ^{**} $p < .01$

注）韓国訪問回数および韓国人友人数については、相関係数の算出には対数変換した値を、記述統計量の報告には回答値をそれぞれ使用している。

はないと判断した。以降の分析では、最終回の IAT 得点も、初回と同様に 4 ブロック構成の IAT による得点化の方法を用いて得られた値を使用する。

3.4 初回における各尺度の相関係数・記述統計量 初回の講義時に測定した各尺度の相関係数および記述統計量を表 4 に示す。2 項目以上で構成される下位尺度については α 係数を算出した。「社会的望ましさ」の α 係数は.69 とやや低いものの、分析には耐えうると判断した。

IAT 得点は、顕在的態度の下位尺度である「個人的親しみやすさ」と、韓国との接触経験尺度の「ドラマ・映画の視聴頻度」と有意傾向ではあるものの正の相関を示した。顕在的態度の下位尺度間の相関はいずれも正の値で有意であり、「個人的親しみやすさ」および「活動性」はいずれも「韓国の訪問回数」、「韓国人の友人数」、「ドラマ・映画の視聴頻度」との正の相関が有意であった。「社会的望ましさ」は、「韓国の訪問回数」との正の相関が有意であった。また、韓国との接触経験尺度の「韓国の訪問回数」は、「韓国人の友人数」、「ドラマ・映画の視聴頻度」との正の相関が有意であった。

3.5 最終回における各尺度の記述統計量 最終回に測定した各尺度の記述統計量を表 5 に示す。こちらも 2 項目以上で構成される下位尺度については α 係数を算出した。最終回においては「活動性」の α 係数が.66 とやや低い値であったものの、各下位尺度を構成する項目を変更すると、プレ・ポストにおける変化を検討することができないため、初回時点と同様の項目を用いて下位尺度を構成することとした。

3.6 初回および最終回における潜在的・顕在的態度尺度の相関 初回に測定した潜在的・顕在的態度

尺度の得点と、最終回に測定した潜在的・顕在的態度尺度の得点の相関係数を求めた。その結果、IAT 得点、個人的親しみやすさ、社会的望ましさ、活動性の順に、2 時点の相関係数はそれぞれ $r_s = .38, .83, .87, .77$ ($ps = .16, <.001, <.001, <.001$) であり、顕在的態度の 3 下位尺度はいずれも 2 時点の相関係数が有意であった一方、2 時点における潜在的態度尺度の相関係数は有意には至らなかった。

3.7 潜在的・顕在的態度の様相 初回および最終回に測定した潜在的・顕在的態度尺度の得点について、理論的中央値（潜在的態度尺度は 0、顕在的態度尺度は 3）からの差を t 検定によって検討した。その結果、潜在的態度尺度の得点は初回、最終回ともに理論的中央値より有意に低く（順に $t(16) = 3.74, p = .002, d = 1.87, t(15) = 4.45, p < .001, d = 2.30$ ）、顕在的態度尺度の下位尺度のうち「社会的望ましさ」「活動性」については初回、最終回ともに理論的中央値より有意に高かった（初回、最終回の順に社会的望ましさは $t(16) = 2.81, p = .01, d = 1.41, t(15) = 4.59, p < .001, d = 2.37$ 、活動性は $t(16) = 4.15, p = .001, d = 2.08, t(15) = 7.22, p < .001, d = 3.73$ ）。顕在的態度尺度の下位尺度のうち「個人的親しみやすさ」の平均値は初回、最終回ともに理論的中央値から有意には離れていなかった（順に $t(16) = 0.61, p = .55, d = 0.31, t(15) = 1.40, p = .18, d = 0.72$ ）。

3.8 最終回で測定した韓国への関心尺度の様相 韓国への関心尺度の各項目について、同様に理論的中央値(3)からの差を t 検定によって検討した。その結果、韓国へのネガティブ感情の平均値は理論的中央値より有意に低く ($t(15) = 2.42, p = .03, d = 1.24$)、それ以外の項目はすべて理論的中央値よ

表 5 最終回における各尺度の記述統計量

	<i>min</i>	<i>max</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	α
IAT得点	-12.00	0.00	-4.63	4.16	-
個人的親しみやすさ	2.30	4.30	3.17	0.50	.83
社会的望ましさ	2.60	5.00	3.73	0.63	.85
活動性	3.20	5.00	3.94	0.52	.66
韓国の理解が深まった	4.00	5.00	4.19	0.40	-
前より韓国について知っていることが増えた	4.00	5.00	4.69	0.48	-
韓国についてもっと調べてみようと思った	2.00	5.00	3.63	0.89	-
韓国へのネガティブ感情	1.00	4.00	2.44	0.93	.81

り有意に高かった ($t_s(15) > 2.82, p_s < .02, d_s > 1.46$)。

3.9 潜在的・顕在的態度の変容 初回および最終回に測定した潜在的・顕在的態度尺度の平均値について、対応のある t 検定を実施した。その結果、潜在的態度尺度である IAT 得点には有意な変化はみられなかった ($t(14) = 0.10, p = .92, r = 0.03$)。顕在的態度尺度については、「個人的親しみやすさ」には有意な変化はみられなかった ($t = 0.68, p = .51, r = 0.18$) が、「社会的望ましさ」($t = 3.46, p = .004, r = 0.68$) および「活動性」($t = 2.35, p = .03, r = 0.53$) には有意な変化が認められ、初回よりも最終回の方が、韓国の「社会的望ましさ」および「活動性」の評定値は高かった。

4. 考察

本研究の目的は、韓国への態度について、IAT および質問紙を用いて潜在的・顕在的に測定し、その変容可能性を検討することであった。以下では、得られた結果について順に考察する。

4.1 IAT の構成について 本研究では、潮村(2015)に記載されている 8 ブロック構成ではなく、4 ブロック構成の短縮版を用いた測定を行った。これが妥当であるか否かを検討するため、最終回には 8 ブロック構成の IAT を実施して得点化したものと、4 ブロック構成の IAT と同様の方法で得点化したものの相関を求めたところ、両者は極めて高い相関係数を示した。この結果は、4 ブロックのみで紙筆版 IAT を実施して得点化した場合も、8 ブロックで実施して得点化した場合と比して大きな差は生じにくいことを示唆する。追加の 4 ブロックを実施した場合、所要時間は 2, 3 分増える程度ではあるものの、同様の課題を繰り返すことによって、参加者の課題への動機づけが低下するかもしれない。特に、講義時間の最後を用いて実施する場合など、参加者ものの一定の疲弊が予想される場合において、この点は重要であろう。もちろん、これは本研究で用いた日本—韓国 IAT でのみ該当する結果である可能性もあるため、態度のみならず自己概念などを測定する IAT を用いた場合でも、同様の結果が得られるか否かを検討する必要があるだろう。

4.2 初回における各尺度の相関関係について 潜在的態度の指標である IAT 得点は、顕在的態度尺度のうち「個人的親しみやすさ」と有意傾向の相関を示した一方、「社会的望ましさ」や「活動性」とは有意な相関を示さなかった。このことは、IAT が測定している韓国への態度の側面が、韓国に対する親しみやすさといった、感情的な成分が多く含まれる側面に近似したものであることを示唆する。IAT の属性語で用いているラベルが「良い—悪い」であることから、このことは首肯できると思われる。

続いて、顕在的態度の 3 下位尺度はともに正の相関関係を示しており、韓国の訪問回数、韓国人の友人数、ドラマ・映画の視聴頻度（社会的望ましさは除く）とも有意もしくは有意傾向の正の相関を示していた。相関関係であり因果の方向には言及できないが、顕在的に韓国への態度がポジティブであるほど、韓国の訪問回数や友人数が多く、ドラマ・映画の視聴頻度が高い（もしくは、韓国の訪問回数や友人数が多く、ドラマ・映画の視聴頻度が高いほど、顕在的に韓国への態度がポジティブである）ことが示された。また、IAT 得点はドラマ・映画の視聴頻度とも有意傾向の正の相関を示した。これらのことが示すのは、態度対象である韓国に触れる頻度が多いほど、潜在的・顕在的な韓国への態度がポジティブになる可能性があるということである。もちろん、ポジティブな態度が韓国への接近行動を促進しているのか、韓国との接触経験を通じてポジティブな態度が形成されているのか、もしくは双方向の影響があるのかは明らかにできないが、このことは態度変容の可能性を探る上で重要と言えよう。

4.3 潜在的・顕在的態度の様相および変容 潜在的態度の指標である IAT 得点は、初回、最終回のいずれの時点でも、理論的中央値より有意に低かった。このことが示すのは、参加者にとって「韓国+良い（もしくは日本+悪い）」よりも「韓国+悪い（もしくは日本+良い）」という 2 つの概念の連合が強かったということである。すなわち、講義を利用した介入を行なっても、潜在的な韓国への態度は初回と変わらずネガティブなままであった。また、初回と最終回の IAT 得点の平均値の差

も有意ではなく、少なくとも週に1度、講義を通じて90分程度の介入を3回程度行うのみでは、潜在的態度を変容させることはできなかったと言える。また、このことは、尾崎（2006）が推察しているように、もともとの潜在的態度がネガティブである場合、その変容が容易ではない可能性を示していると言える。

しかし、このことだけをもって、潜在的態度に多様性教育が影響を及ぼさないと考えるのは早計であろう。潜在的不安への変容が観察されたGamer et al.（2008）の研究では、10時間という本研究よりも長い期間の介入を行っている。かつ、講義ではなくセラピストによる臨床的な介入方法をとっており、本研究よりも直接的であると考えられる。また、尾崎（2006）が述べるように、もともとの評価がネガティブであったものは、介入を行っても容易には変容しない可能性がある。これらのことから、今後は介入の回数を増やす、実際に韓国人とコミュニケーションをとる機会を取り入れるなどの工夫をした上で、継続して検討していく必要があると思われる。

一方、顕在的態度については、初回時点で「社会的望ましさ」および「活動性」の両者の平均値は理論的中央値より高かった。また、最終回で測定したこれらの尺度の得点は、いずれもポジティブな方向に上昇していた。最終回に並行して測定した韓国への関心を問う尺度では、ネガティブ感情の平均値は理論的中央値より低く、韓国への関心を測る項目の平均値は理論的中央値より高かったことから、3回の多様性教育による介入により、参加者の顕在的な態度はポジティブに変容したと考えることができる。ただし、「個人的親しみやすさ」については、平均値はわずかに上昇しているものの、その変化は有意ではなかった。この下位尺度は「社会的望ましさ」および「活動性」とは異なり、初回時点でも最終回時点でも、その平均値が理論的中央値より有意に高いということはなかった。もともとの潜在的態度がネガティブである場合、その変容も難しい可能性があるとする尾崎（2006）の推察は、潜在的態度だけに限らず、顕在的態度でも同様のことが言えるのかもしれない。

「社会的望ましさ」および「活動性」についてはポジティブな態度変容を観察することができたが、この結果は「韓国へのポジティブな態度を表出することが望ましい」と、参加者である学生が感じ取り、それが回答値に現れたという別解釈の可能性を残している。もちろん、この課題や質問への回答の内容は成績などには一切影響しないことを教示しているが、当該授業が多文化社会の理解をテーマにしている以上、「理解が深まった」や、「もっと調べてみようと思った」といった項目に「あてはまらない」と回答することには、もしそのように感じていたとしても抵抗があったと推察できる。そうであれば、同様の影響は、顕在的態度尺度における他の項目への回答値にも現れている可能性は否定できない。一方で、潜在的態度の指標であるIAT得点が初回・最終回ともに理論的中央値より低かった（i.e., 韓国に対する潜在的態度がネガティブであった）ことや、初回と最終回とで変容がみられなかったことは、IATが回答を偽ることが難しいテストであり（Kim, 2003）、自己呈示動機の影響を受けなかったためと考えることもできる^{注4)}。こうした代替説明を排除するためには、参加者にとって「望ましい」と思われる回答が存在しない、もしくはそうした回答があると想像されにくい状況を設定して潜在的・顕在的態度を測定した上で介入を試みるべきであると言える。たとえば、韓国に対するIATや顕在的測度を、他の複数のフィラー項目の中に配置することで、目立ちにくくするといった工夫も考えられる。

4.4 残された課題と今後の展望 本研究は探索的な試みであり、参加者数が少ないことや、介入の回数が3回と多くはなかったこと、授業テーマから推測される「望ましさ」によって、参加者の回答が影響を受けた可能性など、潜在的・顕在的態度の変容可能性を検討するにあたり、様々な要因を統制しきれていないという限界がある。また、統制群（i.e., 韓国の文化以外の講義を受ける群、もしくは全く関連のない講義を受ける群）を設けておらず、今回の顕在的態度の変容が講義による効果であると言い切れない点も課題として挙げられよう。

しかしながら、本研究の結果をポジティブに捉

えるならば、特定の態度対象についての多様性教育を受けることや、当該の態度対象について自身で調べてレポートを作成することなどを通じて接近することで理解が促進され、態度がポジティブに変容する可能性が示されたと言える。今後は、本研究で残された種々の課題を克服した上で、潜在的・顕在的態度の変容可能性を更に検討することが望まれる。

注

1. 「潜在連合テスト」という表現は、必ずしも Implicit Association Test の邦訳として定着しているわけではなく、他にも「潜在的連合テスト（土居・川西, 2012; 金田・岡本, 2015）」、「潜在的連想テスト（井出野・竹村, 2007）」、「インプリシット連合テスト（山崎・内田・横嶋・内山, 2016）」など、研究者によってそれぞれ異なる訳が当てられている。著者はこれまで「潜在連合テスト」という訳を用いて研究を進めてきたため、本研究でも同様の訳を用いているが、このことは、当然ながら他の訳語を否定するものではない。
2. ただし、潜在的な態度の変容は楕円のみに対してみられ、四角への態度は変容していなかった。この結果について尾崎（2006）は、カードの操作前の IAT 課題において、楕円よりも四角の好みが有意に低かったことを挙げ、もともとの態度がポジティブでない対象に対しては、潜在的態度も変容しにくいのではないかと考察している。したがって、たとえば偏見や恐怖症のような、既存のネガティブな潜在的態度も変容しにくいと考えられる、と述べている。
3. 潮村（2015）の紙筆版 IAT は、本研究における最終回の調査で行ったような、4 パターンの組み合わせをすべて使用する内容になっている。ただし、すべての組み合わせを実施することは参加者にとって冗長な印象を与える可能性があると考え、本研究では 2 パターンのみで IAT 得点を算出する。したがって、本研究では試みに最終回のみ 4 パターンの IAT を実施し、2 パターン分で計算した IAT 得点と、4 パターンの全てを用いて算出した IAT 得点の相関を確認する。両者の相関が高ければ、2 パターンで実施した場合でも、4 パタ

ーンで実施した場合と比して、得点に大きな差はないと言えるだろう。

4. Kim（2003）は、IAT で表出される人種への態度がコントロールできるか否か、すなわち IAT の fakability について検討を行なっている。ここでは、IAT の仕組みを教示され、特定の人種（e.g., 黒人）に好意的な態度を示すよう教示された参加者は、「黒人+悪い」に対する反応を遅らせることはできたが、「黒人+良い」に対する反応を速めることはできず、たとえ IAT の構造を知っている者でも、故意に IAT 得点を歪めることはきわめて困難であることが示された。

引用文献

- 相川 充・藤井 勉（2011）. 潜在連合テスト(IAT) を用いた潜在的シャイネス測定の試み 心理学研究, 82, 41-48.
- Allport, G. W. (1935). Attitudes. In C. Murchison (Ed.), *Handbook of social psychology* (pp. 798-844). Worcester, MA: Clark University Press.
- Asendorpf, J. B., Banse, R., & Mücke, D. (2002). Double dissociation between implicit and explicit personality self-concept: The case of shy behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 83, 380-393.
- Back, M. D., Schmukle, S. C. & Egloff, B. (2009). Predicting actual behavior from the explicit and implicit self-concept of personality. *Journal of Personality and Social Psychology*, 97, 533-548.
- Bosson, J. K., Swann, W. r., & Pennebaker, J. W. (2000). Stalking the perfect measure of implicit self-esteem: The blind men and the elephant revisited? *Journal of Personality and Social Psychology*, 79, 631-643.
- Dasgupta, N., & Greenwald, A. G. (2001). On the malleability of automatic attitudes: Combating automatic prejudice with images of admired and disliked individuals. *Journal of Personality and Social Psychology*, 81, 800-814.
- 土居淳子・川西千弘（2012）. 拡散モデルに基づく潜在的連合テストデータの分析 京都光華女子大学研究紀要 50, 111-122.
- Dovidio, J., Kawakami, K., Johnson, C., Johnson, B., & Howard, A. (1997). The nature of prejudice:

- Automatic and controlled processes. *Journal of Experimental Social Psychology*, 33, 510–540.
- Edwards, A. L. (1957). *The social desirability variable in personality assessment and research*. New York, NY: Dryden Press.
- Egloff, B. & Schmukle, S. C. (2002). Predictive validity of an Implicit Association Test for assessing anxiety. *Journal of Personality and Social Psychology*, 83, 1441–1455.
- Egloff, B., Schwerdtfeger, A., & Schmukle, S. C. (2005). Temporal stability of the Implicit Association Test-Anxiety. *Journal of Personality Assessment*, 84, 82–88.
- Fazio, R., & Olson, M. (2003). Implicit measures in social cognition research: Their meaning and use. *Annual Review of Psychology*, 54, 297–327.
- 藤井 勉 (2009). 知能観 IAT 紙筆版作成の試み 学習院大学人文科学論集, 18, 305–319.
- 藤井 勉 (2010). 「暗黙の」知能観と社会的望ましさの関連——他の特性との関連も交えて—— 学習院大学人文科学論集, 19, 151–162.
- 藤井 勉 (2011). 潜在的態度の変容可能性の検討——IAT 研究のレビューから—— 学習院大学文学部研究年報, 57, 89–104.
- 藤井 勉 (2012). 潜在・顕在的態度, 自己概念の「不一致」に関する研究——各種研究における「不一致」の基礎データ集計—— 学習院大学文学部研究年報, 58, 77–86.
- 藤井 勉 (2013a). 対人不安 IAT の作成および妥当性・信頼性の検討 パーソナリティ研究, 22, 23–36.
- 藤井 勉 (2013b). 熟語への潜在的選好の変容に関する研究——顕在的指標との関連も含めて—— パーソナリティ研究, 21, 309–311.
- 藤井 勉 (2014). 潜在的不安は実際の行動を予測するのか?——不安 IAT を用いて—— 日本心理学会第 78 回大会発表論文集, 977.
- 藤井 勉・相川 充 (2013). シャイネスの二重分離モデルの検証——IAT を用いて—— 心理学研究, 84, 529–535.
- 藤井 勉・澤田匡人 (2014). 自尊感情とシャーデンフロイデ——潜在連合テストを用いた関連性の検討—— 感情心理学研究, 21, 114–123.
- 藤井 勉・澤田匡人 (2016). いじめに対する潜在的選好の測定の試み——中学生を対象とした IAT を用いて—— 日本感情心理学会第 24 回大会発表論文集, OS16.
- Fujii, T., & Sawada, M. (2016, July). *Development and validation of bullying-IAT among Japanese junior high school students*. Paper presented at the 31st International Congress of Psychology, Yokohama, Japan, 467.
- Fujii, T., Sawaumi, T., & Aikawa, A. (2013). Test-retest reliability and criterion-related validity of the Implicit Association Test for measuring shyness. *IEICE TRANSACTIONS on Fundamentals of Electronics, Communications and Computer Sciences*, E96-A, 1768–1774.
- Fujii, T., Sawaumi, T., & Aikawa, A. (2014, February). *Buffering effects of implicit self-esteem after failure experience: Investigation among Japanese people*. Poster presented at the 15th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology, Texas, USA, 248.
- 藤井 勉・澤海崇文・相川 充 (2014). 顕在的・潜在的自尊心の不一致と自己愛——自己愛の 3 下位尺度との関連から—— 感情心理学研究, 21, 162–168.
- 藤井 勉・澤海崇文・相川 充 (2015a). シャイネス IAT の再検査信頼性——潜在的シャイネスの変容可能性も含めて—— 心理学研究, 86, 361–367.
- 藤井 勉・澤海崇文・相川 充 (2015b). 顕在的・潜在的シャイネスと心理的適応との関連——IAT を用いて—— 感情心理学研究, 22, 128–134.
- 藤井 勉・澤海崇文・相川 充・中野友香子 (2016). 評価条件づけを用いた顕在的・潜在的シャイネスの変容可能性の検討 教育テスト研究センター年報, 1, 31–33.
- 藤井 勉・上淵 寿 (2010a). 潜在連合テストを用いた暗黙の知能観の査定と信頼性・妥当性の検討 教育心理学研究, 58, 263–274.
- 藤井 勉・上淵 寿 (2010b). 紙筆版 IAT を用いた自尊心査定の試み 東京学芸大学紀要総合教育科学系 I, 61, 113–120.

- 藤井 勉・上淵 寿 (2011). 他者軽視傾向を測定する IAT の作成 東京学芸大学紀要総合教育科学系 I, 62, 287-291.
- 藤井 勉・上淵 寿・利根川 明子・上淵 真理江・山田琴乃 (2010). 他者軽視傾向と社会的望ましさの関連 日本パーソナリティ心理学会第 19 回大会発表論文集, 67.
- 藤井 勉・山田琴乃・上淵 寿・利根川 明子 (2011). 愛着の内的作業モデルを測定する IAT 作成の試み 日本認知心理学会 第9回大会発表論文集, 104.
- Fujiwara, Y., & Fujii, T. (2016, November). *Japanese Implicit and Explicit Attitudes toward Juvenile Delinquents*. Poster presented at the 72nd Annual Meeting of the American Society of Criminology, New Orleans, USA.
- Gamer, J., Schmukle, S. C., Luka-Krausgrill, U., & Egloff, B. (2008). Examining the dynamics of the implicit and the explicit self-concept in social anxiety: Changes in the Implicit Association Test-Anxiety and the Social Phobia Anxiety Inventory following treatment. *Journal of Personality Assessment*, 90, 476-480.
- 権 鎔大 (2015). あなたは本当に「韓国」を知っている?——韓国を知れば日本がわかる!—— 駿河台出版社
- Greenwald, A. G. & Banaji, M. R. (1995). Implicit social cognition: Attitudes, self-esteem, and stereotypes. *Psychological Review*, 102, 4-27.
- Greenwald, A. G., & Farnham, S.D. (2000). Using the implicit association test to measure self-esteem and self-concept. *Journal of Personality and Social Psychology*, 79, 1022-1038.
- Greenwald, A. G., McGhee, D. E., & Schwarz, J. L. K. (1998). Measuring individual differences in implicit cognition: The implicit association test. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74, 1464-1480.
- Hart, C. M., Ritchie, T. D., Hepper, E. G., & Gebauer, J. E. (2015). The Balanced Inventory of Desirable Responding short form (BIDR-16). *SAGE Open*, 5, 1-9.
- Ichikawa, R., Murakami, T., & Mochizuki, S. (2013, March). *The relationships among implicit and explicit self-esteem and undervaluing others*. Poster presented at the 3rd Asian Conference on Psychology and the Behavioral Sciences, Osaka, Japan.
- 井出野 尚・竹村和久 (2007). 潜在的連想テストを用いたリスク・マップの作成 感性工学研究論文集 7, 101-109.
- 金田宗久・岡本 真一郎 (2015). 新聞記事で表記される国籍情報の潜在的影響——潜在連合テストを用いた外国人ステレオタイプ活性化の検討—— 対人社会心理学研究, 15, 45-54.
- Kim, D. Y. (2003). Voluntary controllability of the implicit association test (IAT). *Social Psychology Quarterly*, 66, 83-96.
- 小林知博・岡本浩一 (2004). IAT (Implicit Association Test) の社会技術への応用可能性 社会技術研究論文集, 2, 353-361.
- Krahé, B., & Altwasser, C. (2006). Changing negative attitudes towards persons with physical disabilities: An experimental intervention. *Journal of Community and Applied Social Psychology*, 16, 59-69.
- 栗田季佳 (2015). 見えない偏見の科学——心に潜む障害者への偏見を可視化する—— 京都大学学術出版会
- 栗田季佳・楠見 孝 (2014). 障害者に対する潜在的態度の研究動向と展望 教育心理学研究, 62, 64-80.
- Lane, K. A., Banaji, M. R., Nosek, B. A., & Greenwald, A. G. (2007). Understanding and using the Implicit Association Test: IV: What we know (so far) about the method. In B. Wittenbrink, & N. Schwarz. (Eds.), *Implicit measures of attitudes* (pp. 59-102). New York, NY US: Guilford Press.
- McConnell, A. R., & Leibold, J. M. (2001). Relations among the Implicit Association Test, discriminatory behavior, and explicit measures of racial attitudes. *Journal of Experimental Social Psychology*, 37, 435-442.
- 中野 友香子・藤井 勉 (2013). 達成目標 IAT の妥当性の検討 (3)——再検査信頼性・基準関連妥当性の検討—— 日本社会心理学会第 54 回大会発表論文集, 268.
- Nisbett, R. E., & Wilson, T. D. (1977). Telling more than

- we can know: Verbal reports on mental processes. *Psychological Review*, 84, 231–259.
- 沼崎 誠・工藤 恵理子 (2003). 自己高揚的呈示と自己卑下の呈示が呈示者の能力の推定に及ぼす効果——実験室実験とシナリオ実験との相違——実験社会心理学研究, 43, 36–51.
- 岡部康成・木島恒一・佐藤 徳・山下雅子・丹治哲雄 (2004). 紙筆版潜在連合テストの妥当性の検討——大学生の超能力信奉傾向を題材として——人間科学研究 (文教大学人間科学部), 26, 145–151.
- 大浦真一・福井義一 (2014). 顕在・潜在的内的作業モデルが対人ストレスコーピングに及ぼす影響——潜在連合テスト (Implicit Association Test) を用いた検討——日本教育心理学会第 56 回総会発表論文集, 546.
- Rudman, L. A., Ashmore, R. D., & Gary, M. L. (2001). “Unlearning” automatic biases: The malleability of implicit prejudice and stereotypes. *Journal of Personality and Social Psychology*, 81, 856–868.
- 尾崎由佳 (2006). 接近・回避行動の反復による潜在的態度の変容 実験社会心理学研究, 45, 98–110.
- Sawaumi, T., Fujii, T., Nakano, Y., & Aikawa, A. (2015, August). *Malleability of shyness through evaluative conditioning*. Paper presented at the Joint Conference of the 11th Biennial conference of Asian Association of Social Psychology and 52nd Annual Convention of the Psychological Association of the Philippines, Cebu City, Philippines, 55–56.
- Schmukle, S. C. & Egloff, B. (2004). Does the Implicit Association Test for assessing anxiety measure trait and state variance? *European Journal of Personality*, 18, 483–494.
- 潮村公弘 (2008). 潜在的自己意識の測定とその有効性 下斗米 淳 (編) 自己心理学 6 社会心理学へのアプローチ 金子書房 pp. 48–62.
- 潮村公弘 (2015). 潜在連合テスト (IAT) の実施手続きとガイドライン——紙筆版 IAT を用いた実習プログラム・マニュアル——対人社会心理学研究, 15, 31–38.
- 潮村公弘 (2016). 自分の中の隠された心——非意識的態度の社会心理学——サイエンス社
- 田中 淳・古畑和孝・宮田 加久子・村田光二 (1979). 韓国及び韓国人に対する態度の研究 (II) 日本教育心理学会第 21 回総会発表論文集, 596–597.
- 谷 伊織 (2008) バランス型社会的望ましさを反応尺度日本語版 (BIDR-J) の作成と信頼性・妥当性の検討 パーソナリティ研究, 17, 18–28.
- 上田紋佳 (2012). 特性不安および不安 IAT が感情語の再生成績に及ぼす効果 日本認知心理学会第 10 回大会発表論文集, 81.
- VandenBos, G. R. (2007). *APA dictionary of psychology*. Washington, DC: American Psychological Association.
- Yamada, K., Fujii, T., & Uebuchi, H. (2011, July). *Measuring attachment models using implicit association test*. Poster presented at the 2011 annual meeting of International Society for Research on Emotion, Kyoto, Japan, 238.
- 山田琴乃・藤井 勉・上淵 寿・利根川 明子 (2011). 愛着の内的作業モデルと他者軽視傾向、自尊心の関連 (2)——潜在レベルでの検討——日本心理学会第 75 回大会発表論文集, 1004.
- 山崎勝之・内田 香奈子・横嶋敬行・内山有美 (2016). 無意識と意識、そして、インプリシット心的特徴 鳴門教育大学研究紀要, 31, 1–18.

謝辞

本研究の実施にあたりご協力いただきました学生の皆さんと、貴重な機会を与えていただきました川越明日香先生（長崎大学大学教育イノベーションセンター）に厚く御礼申し上げます。